

23. ついで主はモーセに告げて仰せられた。
24. 「イスラエル人に告げて言え。  
第七月の第一日は、あなたがたの全き休みの日、ラッパを吹き鳴らして記念する聖なる会合である。
25.  どんな労働の仕事もしてはならない。  
火によるささげ物を主にささげなさい。」
26. ついで主はモーセに告げて仰せられた。
27. 「特にこの第七月の十日は贖罪の日、あなたがたのための聖なる会合となる。  
あなたがたは身を戒めて、火によるささげ物を主にささげなければならない。
28.  その日のうちは、いっさいの仕事をしてはならない。  
その日は贖罪の日であり、あなたがたの神、主の前で、あなたがたの贖いがなされるからである。
29.  その日に身を戒めない者はだれでも、その民から断ち切られる。
30.  その日のうちに仕事を少しでもする者はだれでも、わたしはその者を、彼の民の間から滅ぼす。
31.  どんな仕事もしてはならない。  
これは、あなたがたがどこに住んでいても、代々守るべき永遠のおきてである。
32.  これは、あなたがたの全き休みの安息である。  
あなたがたは身を戒める。  
すなわち、その月の九日の夕方には、  
その夕方から次の夕方まで、あなたがたの安息を守らなければならない。」
33. ついで主はモーセに告げて仰せられた。
34. 「イスラエル人に告げて言え。  
この第七月の十五日には、七日間にわたる主の仮庵の祭りが始まる。
35.  最初の日には聖なる会合であって、あなたがたは、労働の仕事はいっさいしてはならない。
36.  七日間、あなたがたは火によるささげ物を主にささげなければならない。  
八日目も、あなたがたは聖なる会合を開かなければならない。  
あなたがたは火によるささげ物を主にささげる。  
これはきよめの集会で、労働の仕事はいっさいしてはならない。
37.  以上が主の例祭である。  
あなたがたは聖なる会合を召集して、火によるささげ物、  
すなわち、全焼のいけにえ、穀物のささげ物、和解のいけにえ、  
注ぎのささげ物を、それぞれ定められた日に、主にささげなければならない。
38.  このほか、主の安息日、また、あなたがたが主にささげる献上物、  
あらゆる誓願のささげ物、進んでささげるあらゆるささげ物がある。
39.  特に、あなたがたがその土地の収穫をし終わった  
第七月の十五日には、七日間にわたる主の祭りを祝わなければならない。  
最初の日には全き休みの日であり、八日目も全き休みの日である。
40.  最初の日には、あなたがたは自分たちのために、

美しい木の実、なつめやしの葉と茂り合った木の太枝、  
また川縁の柳を取り、七日間、あなたがたの神、主の前で喜ぶ。

- 4 1. 年に七日間、主の祭りとしてこれを祝う。  
これはあなたがたが代々守るべき永遠のおきてとして、第七月にこれを祝わなければならない。
- 4 2. あなたがたは七日間、仮庵に住まなければならない。  
イスラエルで生まれた者はみな、仮庵に住まなければならない。
- 4 3. これは、わたしが、エジプトの国からイスラエル人を連れ出したとき、  
彼らを仮庵に住まわせたことを、あなたがたの後の世代が知るためである。  
わたしはあなたがたの神、主である。」
- 4 4. こうしてモーセはイスラエル人に主の例祭について告げた。

## 説教

レビ記 23 章 23 節~44 節では、第 7 の月の祭りについて教えられます。具体的には、①ラッパを吹く日 (23~25)、②大贖罪の日 (26~32)、③仮庵の祭 (33~36,39~43) について教えられます。

- 2 4. 「イスラエル人に告げて言え。

第七月の第一日は、あなたがたの全き休みの日、ラッパを吹き鳴らして記念する聖なる会合である。

- 2 5. どんな労働の仕事もしてはならない。

火によるささげ物を主にささげなさい。」

第 7 の月は、太陽暦で言うと 9~10 月に当たります。そのまず第一目にラッパが吹き鳴らされます。ラッパといってもこれは角笛のことです。角笛は通常、新月祭と例祭に吹き鳴らされました。その際、伝承では祭司たちによって中央聖所でのみ吹き鳴らされました。でも、第 7 の月の第一日目には、有志たちによって全国津々浦々で吹き鳴らされました。ですから、この日はイスラエルの国々のどこにいても、「ブォー、ブォー」と角笛が吹き鳴らされる音をあっちでもこっちでも聞くことができたのです。しかも、この日は「どんな仕事もしてはならない」、「火によるささげ物を主にささげなさい」と命じられ (25)、一切の労働を休み、いけにえをささげ、「聖なる会合」を開いて神さまを礼拝しました。つまり、この日は、全国津々浦々で角笛の吹き鳴らされる音を聞きながら、一日ゆっくり休んで神さまを礼拝したのです。その意味は、これから「大贖罪の日」と「仮庵の祭」がやって来る特別な第 7 の月が到来した、その心備えをするようにとの意味でしょう。後に、ラッパを吹く日は「恐れの日」と呼ばれ、来るべき神の審判と救いに備えをなすよう告げ知らせる日とされました。

第 7 の月の 10 日は「大贖罪の日」と定められます。この日に関しては既に 16 章で詳述したので省略しますが、要するに、年に一度この日に、ただひとり大祭司が至聖所(契約の箱の置いてある、幕屋の一番奥の部屋)に入って、祭司と幕屋と全イスラエルを聖別するのです。大祭司は、この日はいつもの宝石が輝く青い大祭司の衣装を脱ぎ、全身水を浴びて身をきよめ、上下白い亜麻布の祭司服のみを質素に身に着けます。そして、大祭司はまず自分と自分の家族のために「罪のためのいけにえ」として雄牛をささげます。それから、至聖所の手前にある香の祭壇から取った炭火に両手一杯の粉末の香を乗せて炊いたものと一緒に、ほふった雄牛の血を至聖所に持って入り、契約の箱の純金の蓋の前面に雄牛の血を七回振りかけ、自分と自分の家族が犯した罪で汚された聖所をきよめます。次に、「罪のためのいけにえ」のやぎをほふり、その血を至聖所に持って入り、もうもうと煙が立ち込めて「贖いのふた」が見えなくなるようにしながら、その贖いのふた(契約の箱の純金の蓋のことで、二人の天使が羽を広げて契約の箱

を守っている。神さまがその所に於いてご自身の臨在の栄光をあらわすと言われた)の前面に雄牛の血を七回振りかけます。そうして、イスラエルの民が犯した罪の故に汚されてしまった聖所、幕屋をきよめます。そして、先の雄牛の血とやぎの血を祭壇の角に塗り、残りの血を祭壇に七回振りかけて、聖所、会見の天幕、祭壇を汚れからきよめるのでした。こうして幕屋は再び聖さを回復して神さまの宿る所となり、聖別された幕屋を通して神と人との交わりは回復し、人はいのちを回復します。これが年に一度の大贖罪の日です。

この日には「身を戒める」ことが命じられ、その日に「身を戒めない者」は「断ち切られ」、「滅ぼす」と警告されます(29,30)。「身を戒める(『自らを悩ませる、低くする』の意味)」とは、具体的には断食することを意味します。ユダヤ教徒はそれ以外にこの日は入浴や化粧をしません。新聞は休刊し、人々はユダヤ教の会堂に集まって低い椅子に座り、罪を悔い改める祈りを繰り返します。戦争は休戦し、スポーツ競技も休みます。1965年、この日がメジャーリーグのワールドシリーズ開幕戦に重なった時、ドジャーズのユダヤ人投手サンディ・コーファックスは先発を拒否しました。1973年には、エジプトのサダト大統領が、わざわざこの日を狙ってイスラエルを攻撃したためイスラエルは対アラブ諸国戦争で初の敗北を喫します。そうやって、全イスラエルが、こぞって、罪の贖いに与るのでした。

第7月の15日からは「仮庵の祭」が始まります。この日は「土地の収穫をし終わった」収穫感謝祭でもあります(39)。ぶどうの実やその他のあらゆる果樹を収穫し終えたことへの感謝を神さまにささげる一年中で最も喜ばしい時です。それで、この収穫感謝の習慣は、まずピューリタンたちによりニュー・イングランドで、後にはカナダと合衆国で「収穫感謝祭」として祝われるに至ったほどです。ピューリタンたちはアメリカ移住をカナン入植に重ね合わせて感謝したのでしょう。

収穫感謝の祭なだけに、神さまへのささげ物も半端ではありません。それに詳しい民数記29章も参考にすると、一週間で全焼のいけにえとしてささげる雄牛だけでも全部で70頭です。その他雄の子羊は98頭、雄羊14頭、雄やぎ7頭、それに穀物のささげ物、注ぎのささげ物などが神さまにささげられます。全焼のいけにえというのは、すべて灰にすることで神さまへの完全な献身を表明するものです。つまり、これらの収穫はすべて神さまがくださったものだということを行動で表明すると同時に、収穫の恵みを与えてくださった神さまに彼らが自分の生涯と持ち物とを神さまにささげますという表明なのです。たくさん神さまから恵みを現物でいただいたから、たくさん神さまに感謝を現物でささげます。しかも、その際には、貧しい者にも施します。自分と自分の「息子、娘、男女の奴隷、あなたの町囲みのうちにいるレビ人、在留異国人、みなしご、やもめも共に喜」んで収穫を味わうよう命じられています(申命記16:14)。そのささげ物の多さは最大です。つまり、たくさん神さまから恵みをいただいたので、たくさん神さまにささげ、たくさん人々に施し、たくさん自分も食べて喜び祝う、それが「仮庵の祭」なのです。

同時に、注目すべきは、その祝い方です。「仮庵(掘っ立て小屋)」を立て、そこにぶどうなどの果物を飾り立てて、そこで一週間生活するという、極めてユニークなものでした。

**40. 最初の日に、あなたがたは自分たちのために、  
美しい木の実、なつめやしの葉と茂り合った木の太枝、  
また川縁の柳を取り、七日間、あなたがたの神、主の前で喜ぶ。**

これは要するにキャンプ生活です。難民キャンプの再現です。でも、それは、一見、不便で楽しくないように見えますが、でも実はとても楽しいものようです。何故なら、この時は収穫感謝の時であると同時に、こうして貧しいボロ屋で生活しながらかつての自分たちの貧しさと苦勞を思い出すなら、今の生活は奇跡です。驚くべき神さまの恵みです。どんなに神さまが自分を祝福してくださったかがよくわかります。だから、感謝なのです。

それで、その意味が次のように説明されます。

43. これは、わたしが、エジプトの国からイスラエル人を連れ出したとき、  
彼らを仮庵に住ませたことを、あなたがたの後の世代が知るためである。  
わたしはあなたがたの神、主である。」

つまり、イスラエルがどんなに豊かに繁栄したとしても、出エジプトした頃の貧しいキャンプ生活を忘れないよう、それを思い出しては今の祝福と繁栄を神さまに感謝して大いに喜び祝うように、というのでした。不便で不利な状況の中で、あばら屋で、粗末なボロ屋の中で、つまり、仮庵の中で、こんなにも愛されて神さまに生かされていることを感謝する、それが神さまのやり方ということです。そして、贖罪と収穫、それは要するに、自分たちの「救いの原点」と「存在の原点」です。自分たちの救いと存在の原点を見つめ直して、心から感謝を捧げて喜び祝う、それが年に一度、第7番目の月に行われる、イスラエル最大の祭りの意味なのです。前々回学んだ「安息日」も、前回学んだ「過越の祭り」、「七週目の祭り」もそうでした。自分たちの救いといのちの原点を思い出して感謝する、それが「安息日」「過越の祭」「七週目の祭り」の意味でした。ここでも同じです。自分たちが神さまに生かされ、救われている、この事実を毎週の安息日に思い出し、年に一度の行事である過越の祭り、七週目の祭りで思い出し、そして、さらには第7の月のラッパ、大贖罪、収穫感謝の祭りに於いて、一ヶ月かけて、あるいは一週間かけて、徹底的に、思い切り思い知る、それが、神の民イスラエルを生かす力、彼らのいのちの源なのです。既に学んだ聖潔律法、神の祭司としての、あるいは神の民として神の栄光をあらわして生きていく力となるのです。

ちなみに、ラッパ、贖い、収穫と並べば、これはまさしく世の終わりの出来事を集約したものと言えます。世の終わりを告げ知らせるラッパが鳴り響き、最後の審判とただひとり真の大祭司キリストが、まことの天の聖所に入って罪の贖いを成し遂げて救いのわざが完成する、そうやってすべてが新しくされるのです。ラッパ、祝宴、収穫、その中にある罪赦された喜び、豊かな食物により養われ生かされている喜び～それは永遠の救い、永遠のいのちの恵みの前味です。年に一度は、この神の栄光を仰ぎ見たのです。イスラエルは、救われた喜び、生かされている喜びと感謝をもって、神と人を愛しました。つまり、神さまに捧げ物をささげ、人に施しをしました。

私たちはキリストにあって救われ、より明らかに神の栄光を仰ぎ見ている幸いな者たちです。ここに集われた兄弟姉妹が、一層の喜びと感謝をもって、神と人を愛し、神さまにささげ、人に施し、神の栄光をあらわして生きて行かれるよう祈ります。